上代蒙古に於ける車輛交通

內田吟風

序文

乾燥し切つた細い砂粒のみから成り立つた完全な沙漠では、車輛は最早その用をなさない。そこでは僅に駱駝の背——近離距ならば馬・驢の背——が、昔も今も唯一の運輸機關となる。

然し蒙古では、その周邊は主に車の自由に通ひ得る草原地帶であるし、ゴビ地方でさへ、概ね赤い砂利や石英・玉髓等の破片の砂礫質なので、車輛の進行を妨げない。所謂キヤフタ・トラクトのやうに、キヤフタからウランバトール（庫倫）を經て北京に至るまで一氣に自動車を飛ばし得るやうな路線が幾つもある。從つてこの地方では、古くから馬背や駱駝の背の外に、車輛が重要な運搬用具として發達して來たのである。

現在こゝでは、トルキスタンに於けると同樣四輪の荷車や、自量三五〇—五〇〇封度に對し七〇〇乃至一〇〇〇封度の積載量をもつ二輪馬車「アルバ」が、旅行用荷積用としての車として盛に用ひられることや、自動車トラックが盛に往返してゐる——駱駝の隊商が二十五日から三十日も要した行程を僅かに二、三日で疾驅してゐる——ことや、また古くチンギス・ハン蒙古の時代に、歐羅巴に侵入した蒙古軍が大小樣々の牛馬駱駝車をば輜重や兵舍として使用したこと等々については、既に一般周知のことのやうである。然しこの人類の發明中、最大のものゝ一つである車の使用が、蒙古では果して何時の頃にまで溯つて認められるかといふ如き問題については、從來特に取り立てゝ考へられてゐたものが無いやうであるから、以下若干卑見を述べて見ようと思ふ。

1

有名な周代の鼎「小盂鼎」の銘文中の

王□盂以□□伐鬼方、□□□□□□〔執酋〕二人、獲馘□□□□馘、俘人萬三千八十一人、俘〔馬〕□□匹、俘車十輛、俘牛三百五十五牛、羊卅八羊。盂□□□□□□□□□我征執酋一人獲馘百卅七馘、〔俘人〕□□□□〔人〕、俘〔馬〕百三匹、俘車百輛

と解讀される部分に對して、從來古代史家や金文學者等は周の成王若しくは康王の時代に、當時內蒙古より、

或は西蒙古とも云ふべき甘肅方面より、今の陝西省中部に侵入居住して居たと思はれる鬼方(鬼戎)なる民族を周軍が討破し、その酋庶を捕馘し、多數の車馬を鹵獲した事件を記錄したものと考證してゐるのである。

また周の穆王の內蒙古及び甘肅地方遠征を記錄せるものと傳へられる「穆天子傳」の中には、屢〻蒙古居住の種族が、「駟」卽ち馬車牽引用に調敎された四頭一組の馬を、周軍に齎らして周の物貨と交換したことが記錄されてゐる。

小盂鼎の事件は、蒙古本地での出來事ではないが、鬼方族が蒙古甘肅方面に本據をもつた民族であつたことは略〻疑ない處である。また「穆天子傳」についても穆王遠征が史實なりや否やは猶考慮の餘地あるも、其記事は、本傳が襄王陵に藏されたる戰國時代、すなはち西曆前四・五世紀頃迄の蒙古の事象を根據として周・魏の史官が編纂したものである。從つてこの二文獻のみを以て、直ちに周代初期、西曆前十世紀の頃に既に蒙古では車が盛に用ひられてゐた明證とは斷言し難いまでも、これらは爾餘の事情*をも綜合して考へる限り、少くとも周末の西曆前四・五世紀頃までに於いて、既に蒙古には相當の車輛の使用があつたことを物語る文獻と見なすべきものであらう。

* 太平御覽所引「司馬法」の佚文『司馬法曰、夏曰予車、殷曰胡奴車、周曰輜車』、「周禮」鄭注に引かれし同佚文『司馬法曰、夏后氏謂輦曰余車。殷曰胡奴車、周曰輜輦』また漢の劉熙「釋名」の『胡車、車胡以罪沒入爲官奴者引之、殷所制也』の胡奴車或は胡車は、恐らく蒙古方面の車を摸倣したるものなるべく、車胡とは車の製作或は操縱に特に熟達し居たるため左樣の稱呼を得たる蒙古の或る一種族の名であらう。殷制云々は勿論疑はしきも、然し「司馬法」の纒められた戰國時代以前に、かゝる車や種族があつたことは、先づ否めない處であらう。

2

蒙古に於ける車輛交通が、文獻の上に、明瞭に認められるに至るのは、西曆前第三世紀の末期、すなはち匈奴民族の勃興の頃からのことである。

太平御覽に引用された「異物志」の遺文を見ると

月氏俗、乘四輪車、或四牛、或八牛、可容二十人

とあつて、匈奴が東トルキスタンを征服する以前、その東部、すなはち今の敦煌附近より天山東部に至る一帶の大地域に繁榮してゐた「月氏」民族は既に四牛或

は八牛に牽かしめる二十人乗の大牛車を使用してゐたのであるが、月氏民族や外蒙諸族を亡ぼして、内外蒙古東トルキスタンを版圖とした「匈奴」民族も亦、彼等の車の一種に、この月氏の車と同樣なものを有してゐたやうに思はれる。

それは「轒轀」として記錄されてゐる車であつて、漢の楊雄の長楊賦（文選　漢書楊雄傳所引）に、漢軍が外蒙に匈奴の軍を破つたことを歌つて

　　碎轒轀、破穹廬……遂獵王庭

といふ文句が見える。

轒轀といふ名の車は、匈奴にのみあつたのではなく、支那にもあつて、「墨子備城門篇」や「孫子謀攻篇註」等によると、これは古代の支那人が城壁を破るのに用ひた兵車に外ならない。*

文獻の缺除は、轒轀なる語が元來匈奴語の音譯なのであるか、本來漢語なのであるか、將又匈奴の轒轀と支那の轒轀とが全然同一のものであつたかどうか、それらのことに關しては、充分の解決を與へては呉れない。

然し乍ら、楊雄の長楊賦を信ずる限り、當時匈奴には轒轀なる車があつたことは認めねばならない。さうして應劭の「轒轀、匈奴車也」といふ註釋や、服虔の

　　轒轀、百二十步兵車、或可寢處

といふ註釋や、また後世匈奴に代つて蒙古に繁榮した鮮卑拓跋氏や蠕蠕に於いてのこの轒轀車の使用狀態等**を參照するならば、吾々は匈奴の轒轀が戰鬪に堪ゆる堅牢な車輪と、風雨矢石を防ぐに足る頑丈さと、人の起臥が自由に出來る廣さをもつた屋根覆ひから出來上つた重量の車體を有し、その爲に恐らく月氏の車と同樣に、多數の牛を以て牽かねばならなかつたであらうことが想像される。***

* また轀輬車なるものあり。後世喪車に用ゆるも、元來開閉によりて溫涼を調節し得る窓を備へし起臥し得る旅行用大車であつた。だから秦始皇が旅行中崩御したとき近臣達はその屍をこれに載せて旅行をつゞけ、生ける人の如く裝はうたのである。

** 鮮卑拓跋族には「神車」といつた車上の祠や二十人乗の「黑氈行殿」すら有つた。拓跋珪は匈奴赫連の軍と戰ふた時、後世の蒙古部のキユリエンの如く車を連ねて方營とし、戰ひ進んだといふ。拓跋嗣（明元帝）は、劉義符の虎牢城を攻むるに、城中の水を絶つべく城外の河に艦を連ね、その上に「轒轀」を置いて、城兵が河に水を汲むを得ざら

しめた。また蠕蠕族の王阿那瓌は、北魏の使者元孚を抑留し、これを「轀車」に載せて北走した。轀車とは輜轀と同様のものであらう。同阿那瓌は元孚が魏の宗室であるのを知つて、これを人質としたのであるが、また一方これを尊待し、行臺として推戴し起臥の自由な輜轀に載せ酒肉を奉じて優待したのである。

＊＊＊外蒙「ノインウラ古墳」に發見された多くの匈奴の遺物中に見出された車の殘片は、この巨大な輜轀車を偲ぶよすがとはならない。この出土品は恐らく匈奴の王侯が他の多くの貴品と同樣漢廷より贈られたものであらう。漢書匈奴傳等を檢すると、漢から匈奴に屢々安車を贈つた例がある。安車は考工記や漢官儀・魏收魏書等によれば王后の乘である。單于や匈奴王侯等はこれらの其精巧美麗なる支那の車を珍重して墳墓に副葬するに至つたのであらう。といふやうなことも充分想像されやう。

3

匈奴人は、斯樣な大きい輜轀車の外に、なほ數匹の馬によつて牽かれる輕快な乘用馬車をも有つてゐたが、然し彼等が西曆四・五世紀の頃に蒙古に繁榮した勅勒族（チュルク）と同樣に、駱駝でひく車を*も、既に當時有つてゐたかどうかといふ點になると甚だ明證が無い。

もつとも駱駝は、古くから駄獸として、蒙古の古住民達がこれを飼畜してゐたことは、史記漢書の匈奴傳の各所の記事に散見するところであつて、彼等は「競馬」と「鬪駱駝」を祭禮の最大行事にしたものである。既に西曆前四・五世紀以後の支那人達も、この駱駝をば橐佗・橐駝・駱駝等々と記して、蒙古方面より輸入すべき重要なる畜産の一に數へてゐたのである。＊＊

兎に角、駱駝は蒙古方面に於いて當時既に重要な運搬獸として飼畜されてゐたもので、かの郅支單于が蒙古を去つてタラス河畔に移動した際にも「數千匹の駱駝と驢馬が使役された」と記錄せられてゐる。

彼等が馬車を使用してゐたことは、嘗て冒頓單于が東トルキスタンの諸國の征討を完成したことを、漢の文帝に誇示通告した際、その使者係虜淺なるものをして駱駝一・騎馬二・駕二駟を文帝に贈らしめたことによつても明である。顏師古も註してゐるやうに、駕は馬車のことであり、二駟は馬車牽引を調教された八頭の馬に外ならない。

また漢の大將軍衞青が、外蒙古に匈奴を急襲した際、伊稚斜單于は、「六贏（ラ）」に乘じ壯騎數百を從へて遁走したと漢書霍去病傳は記錄してゐるが、この「六贏」

とは六頭の羸（馬牝・驢牡間に生ぜし强馬）の曳く快速の馬車のことに相違ないと思はれる。

* 勅勒族はその車輪の高大（且つ輻數至つて多き）より當時支那人より高車族と稱せられた。その車は類族突厥と同樣毛布を屋根とせる所謂「氈車」が多かつたと思はれる。而して北魏の軍隊がこの族との一度の戰鬪で二十餘萬乘の高車を鹵獲した程、彼等は多數の車を有してゐた。イエニセイ河畔の岸壁に發見された一群の狩獵生活を刻せる圖は彼等の彫刻せるもので、その中には駱駝車と馬橇が見えてゐる。（文末カット參照）

** 蒙古の駱駝は所謂双峯駝である。彼等は四五百封度を搬ぶ。西方の單峯駝も古代に於て蒙古に輸入されてゐたことは文獻や遺物の上から想像される。駱駝が、西曆前數世紀の古に既に支那人にまで知られてゐたことは、「山海經」中、戰國時代人の補記と思はれる條に、「橐駝善行流沙中、日三百里、負千斤」とあり、また「史記」蘇秦傳に「蘇秦說楚威王曰、大王誠能用臣之愚計、則燕代橐駝良馬必實外廐」と見えることによつても解かる。「鹽鐵論」には漢と匈奴との關市交易を說いて、漢の僅少なる絹によつて匈奴の驢騾駱駝の如き萬金の良畜の陸續入塞するの利を云つてゐる。

4

漢書西域傳の記載から推すに、匈奴にも後世蒙古の牌札と同樣の制度があつて「單于の一信」を有する使者は自由に食糧・車馬を途次の地方から得て旅をつゞけたやうであるが、軍隊の移動はさう簡單にはゆかなかつた。

匈奴の一軍團は數千騎乃至一萬騎を以て組織されてゐたが、漢に對するときは常に二十或は三十に達する軍團が動員された。從つてこの數十萬の騎兵軍を保持する輜重は夥しい量に上つた。漢書はこれらを「胡輜重」とか又「車輜」など〻記してゐる。**

食用及び搬獸としての牛羊馬駱駝の畜群と上述の如き匈奴の車群とが、絡繹としてゴビを南下***し來つた當時の有樣が如何に壯觀であつたかは想像に難くない。

勿論、漢の征蒙軍はこれにもまして大規模の輜重であつた。武帝の時、貳師將軍が東トルキスタン・パミルを越えてフェルガナの大宛を攻めた時は、李廣利傳によれば、牛十萬、馬三萬、驢及駱駝萬餘を發したのであるが、當時頻々と行はれた外蒙への匈奴遠征にも略〻これに近いものを動かしたと見てよいであらう。たゞ騎馬用にすら馬に不足勝ちであつた當時の漢に於いては、此處にあげた數字の上からも、また匈奴傳に記錄されてゐる將軍嚴尤の匈奴遠征の輜重についての

説明から見ても解るやうに專ら車輜運轉には牛を以てした如くであるが、然しその車數は極めて多かつたものゝ如くである。將軍李陵が外蒙古に出でゝ匈奴と戰つたとき、その軍中の兵卒は多く婦女を車中に匿し伴ひ士氣弛廢してゐたので、陵はこれを搜得して皆斬つたと記錄されてゐる。これらの車の中には糧食を運ぶのみでなく、負傷兵を載する輦（テグルマ）や兵營となす大車や、環狀に連ねて堡壘となし得るやう特に頑丈に造られた「武剛車」と稱する兵車等が多數に含まれてゐた。

＊文字を有せず「刻木・卷衣」して信とした匈奴族の此の「單于の一信」は、恐らく唐代の蒙古制覇族突厥の『兵馬を徵發し、雜畜を科稅するには、木を刻して數を示し、之に一の金鏃箭の蠟封して印せるものを添へて信とした』といふものに類似したものであつたらう。中央に召致する囚人の如きも、部落より部落に「傳送」して單于庭に致したことは、張騫の捕縛の際の事實からも知られる。金箭を君長の告知の印としたのは、當時一般の風習らしく、吐蕃（チベット）族は、鐵箭・金箭を用ひたといはれる。尙、この吐蕃族は當時百唐里毎に「一驛」を置いてゐたと記錄されてゐる（唐會要）。

蒙古に於いて車馬による長途の旅行が、古くより發達してゐたのは、地勢の平廣が上述の如き宿舍兼用の車を驅るに甚だ便であつたからのみでなく、その牽引・騎乘の馬の食料が野草にて足り「粟食」を要しなかつたことに負うてゐる。「鹽鐵論」論功篇や「東觀記」馬防傳等によると、粟穀を必要とする支那馬を率ゐた漢の征蒙軍と、この粟食せぬ蒙古馬をもつた匈奴とは、當時の蒙古高原を舞臺とした廣大な地域に於ける戰爭に於いて、甚だしい交通上のハンデキャップを齎らされてゐたやうである。

＊＊漢書匈奴傳霍去病傳等參照。尙その車輜には糧秣の外に、その牛馬羊を世話する婦女が起居し、また負傷者死者捕虜等が收容されてゐたと思はれる。後世の蒙古人や他の多くの遊牧民族と同樣、匈奴の婦女子も亦軍陣や長途の徵稅旅行等に參加した。冒頓の白登攻圍に於ける閼氏の發言、郅支の多賴城における閼氏の奮戰は有名である。

なほ彼等は漢將李廣を捕へた時の如く、重傷者の生じてこれを收容すべき車輛の無い場合は、二馬を並絡して其間をベッドの如くして運搬する方法をとつたやうである。

＊＊＊當時の蒙古交通路線については'Prof.A.Herrmann, Die Gobi im Zeitalter der Hunnenherrschaft. に稍々詳しく述べられてゐる。平時には漢との「**合市**」の爲に單于以下多數の人畜車輛がこの路を往返したのである。

5

斯樣な大軍團や車輜の移動は必然的に蒙古における橋梁の架設を促進した。たゞ文獻の上に見ゆる古代蒙

古の橋梁は、總て軍事上の必要からのみ架設せられたるものゝ如くである。

すなはち西暦前一二九年、漢の將軍衞青が、內蒙古包頭五原方面に匈奴族を遠征した時、黃河の派流北河に架けたものがそれである。これは漢書衞青傳に、この遠征を賞せる武帝の詔勅を載せて、「遂西定河南地、案榆谿舊塞、絕梓嶺、梁北河〔如淳曰絕度也爲北河作橋梁也〕、討蒲泥、破符離〔晉灼曰蒲泥苻離、二王號也〕」とあるものだが、又別に、匈奴自身が外蒙に於て橋を作つた事例もある。

これは漢の始元六年〔西暦前八一〕に、時の匈奴單于壺衍鞮が、漢に近い內蒙古の歐脫及び受降城の二地方に多數の人民及び軍隊を屯せしめたが、漢軍の襲來ある場合、急速に退却し得るやう余吾水（今のオンギン河？）に橋を架設したといふ漢書匈奴傳の明記によつても知られる。

匈奴の橋が如何なる規模構造であつたか、これは今日知ることができないが、これより數世紀の後の吐谷渾族の橋「河厲」は

長百五十步、兩岸壘石作基陛、節節相次、大木從橫更鎖、壓兩邊俱平、相去三丈、並大材、以板橫次之〔段國沙洲記〕

といふやうなものであり、また當時焉耆國（今の東トルキスタン・カラシャール）には

班超討焉耆。焉耆國有葦橋之險。焉耆王廣乃絕橋、不欲令漢軍入國、超更從他道渡〔東觀漢記〕

とあるやうな索橋があつた。單于が余吾水に架した橋が、果して是等と類似のものであつたか否かは不明であるが、然しその架橋の目的から見ても、少くともそれが彼等の大車と騎兵の群の通過に耐ゆる堅牢なものであつたであらうことは想像に難くないであらう。

なほ南匈奴傳は北匈奴が嘗て黃河を渡つてオルドスの同族を伴ひ去るべく「馬革船」なるものを造つたことを傳へてゐる。恐らくこれは、他の多くの遊牧民族が所有してゐた、且つ現在もしてゐると同樣に馬の皮革を以て「浮袋」となし、これを連ねて船としたものであらう。*

* 甘肅に於いて、漢將鄧訓が羌（タングート）を討つた時の「縫革爲船、置於筏上、以渡河、掩擊諸羌」（東觀記）もこの風習を採つたものであらう。革船は柔軟なる爲、蒙古

甘肅の急峻岩石の川に於いて便利であつたと思ぼしく、隋唐の頃の甘肅の事情と考へられるが「瀘水浚急而多巉石、土人以牛皮爲船、方渉津涘」〔十道記〕とある。唐代の室韋東女族等も革船を用ひたと記錄されてゐる。

現在トルキスタンの土人は「ツルスク」と稱して山羊の革袋を用ゆる。二三封度の重量で空氣を拔けば上着の下に充分藏へる。浮として使ふには一個で足りるが、舟として用ゆるには一人につき六個、六人を載せるに十二個を筏に連結する必要がある。

6

轅輻が巨大で堅牢であつたことは既に述べたが、匈奴の車はすべて、原野の馳驅と絕え間なき民族間の戰鬪に適應すべく素朴で堅牢であつた。「鹽鐵論」には

夫匈奴之車器、無銀黃絲染之飾、素成而務堅、無裙襈曲襟之制、覩成而務完

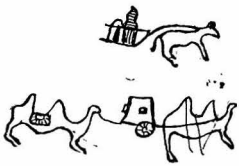
とあるから、恐らくスキタイ人のそれと同樣に頑丈粗野そのものであつたらうと思はれる。（題上カット參照）

匈奴が蒙古の地を去つて、歐羅巴にフンとして現はれた時、彼等は矢張り多數の車を從へてゐた。

當時のローマの史家達は、彼等フンが、平野の上、森林の中を徘徊する間、その妻子を荷車乃至小車上の天幕の中に殘して置くとか、また Mauriac 原野の合戰に西ゴート王 Thorismond がフンの車の間に陷つて危く戰死しかけたといふ事件を傳へてゐる。

漢書匈奴傳は烏珠留單于の言として、匈奴西邊の諸侯は總て匈奴溫偶駼（オングート？）王の管地たる今の甘肅中央部北邊の地方の山から出る木材を以てその穹廬と「車」を製作したことを記錄してゐる。歐洲の地を蹂躙したフンの車にも、どうやらこの東洋甘肅の木材で出來てゐたのが、少くなかつたらうといふことは、全く愉快な話ではなからうか。

罪人の足を車輪を以て轢碎する殘酷な匈奴の刑罰のことや、契丹の先祖や嚈噠が車の使用を知らなかつたことや、その後の蒙古諸族回鶻族のカングリ、蒙古部のテルゲン等についても勿論、叙ぶべきものが多いが、今は割愛する。



〔カットはスキタイ族の車（土偶）と、イエニセイ岩壁彫刻中の剌勒族の馬橇と駱駝車〕